

# 「水子供養」研究の動向（1977-1994）と「水子供養」 関連文献目録

（第一群：研究論文・評論・ルポルタージュ等）

鳥井 由紀子

## はじめに

「水子供養」は宗教学的に重要なテーマをいくつも含む魅力的な対象である。しかし、その実態を明らかにする研究はまだ始まったばかりのようである。ここでは「水子供養」に関連した文献の目録を提示するとともに現在までの研究や紹介の動向について述べたい。「水子供養」に関わる文献を大きく第一群と第二群の二つに分けた。今回は第一群のみを扱う。第一群は表題にもあるように研究書、研究論文、評論、エッセイ、ルポルタージュなどで、「水子供養」について少なくとも書き手の意図としては客観的に分析、描写、紹介、批判などを試みたものである。第二群はそれに対して「水子供養」の教義書、思想書、布教トラクトなどに当たるもので、なぜ「水子供養」が必要か、「水子」とは何か、儀礼はどのように行いその意味は何か、人（特に女性）は如何に生きるべきかなどを説いたものである。この目録は1994年11月現在までに私が入手し得たものの目録である。未入手のもの、まだ私が知らないものは当然のことながら含まれていない<sup>(1)</sup>。

「みずこ」、「みずこくよう」（「水子」、「水子供養」）の語及び用法は、「水子供養」という現象が歴史的に限定された時期に現れていると見られる点、その時に特定の限定された主張やメッセージや世界観を乗せて流布していったと見られる点から、近世などの類似の現象をも含んで使用する用法（宮田93、東77、清水94、森栗94など）はとらない<sup>(2)</sup>。また、最近の論文の中には不用意な拡大解釈とも見られる点が散見され注意が必要であろう<sup>(3)</sup>。

この文献目録には、関連があると思われるものでも「水子」や「水子供養」「水子地蔵」などの語が現れないものは含めていない。また、主たるテーマとして「水子供養」を取り上げていなくても、民間宗教者の世界や優生保護法改正問題などを扱いながらこれに触れているものを含めた。新聞記事及び雑誌記事（いわゆる一般週刊誌、女性週刊誌など）は現在未整理のため今回は含めなかった<sup>(4)</sup>。事典項目等についても機会をあらためて述べたい。

目録に取り上げた文献が発表された時期の幅はわずか18年である。時間を追ってテーマや傾向に違いが出てくるほどの変化は見られない。視点、論点、取り上げるテーマなどは書き手の見方、考え方の違いによるところが大きいと思われる。

以下小項目をたてて概観を試みる。小項目のたて方は主として書き手が何に注目しているかを基準とした。小項目内の順番は原則として発表年の早いものから並べたが、小項目内でさらに内容別に分けた箇所や内容の連関を重視した箇所はこの限りではない。

## 1. 概観や現況の報告

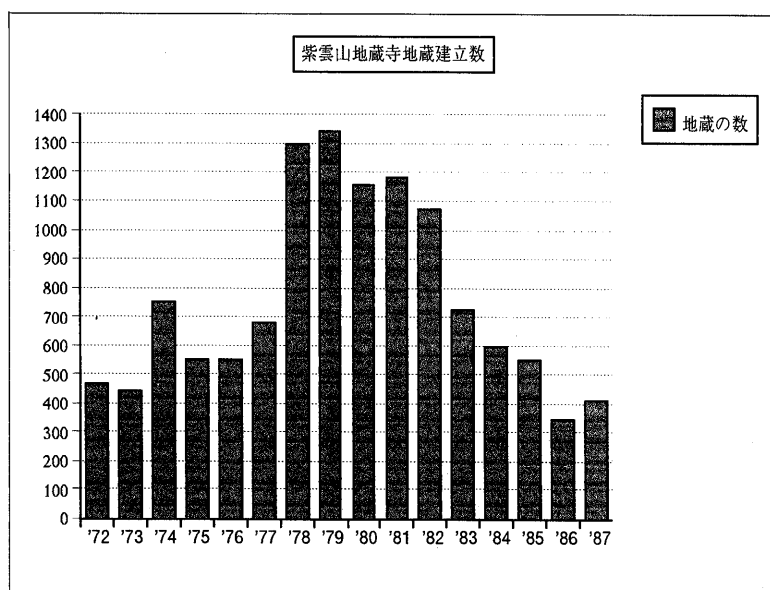
ブルックス81は「水子供養」を包括的にあつかった論文としては最も早いものではなかろうか。1979年に日本で行なった調査に基づく。調査は雑誌、新聞記事に現れる「水子供養」関係の記事、

関係者へのインタビューなどを含み、当時の主だった「水子供養」関係寺院が言及されており「水子供養」を多面的に描き出している。著者の問題意識が「水子供養」は正統仏教的であろうかというところに置かれているため現代の「水子供養」の発生や展開に関係する直接の指摘は少ないが、当時の関係者の意見や資料を記録しているため結果的には示唆に富む内容となっている。1975年にテレビ放映が行なわれてから一般化したという指摘、「水子供養」を行っている寺院を伝統仏教寺院と非伝統仏教寺院に分け後者をさらに新宗教と「水子供養」専門寺院に分けている点、また、病院で行なわれている「水子供養」の指摘などを行いながら79年当時の「水子供養」の現状が紹介されている。儀礼の方法の説明の他、寺院別に「水子供養」にかかる費用も記述されている。また、商業化の傾向に関連して、家族別に一体ずつの地蔵を建てる方法が「水子供養」の商業化を促進したという佐伯真光氏の見方を紹介している。

ヴェルブrouスキー 91 は「水子供養」という現象が教団単位、宗派単位で起こっているのではなくそれらを横断して観察される現象であること、しかもそれが「前提、信条、行為のひとまとまり」としてとらえることのできる新しい現象であることに注目し、この観点からの概観を試みたものである。この論文の特質は、これまでの「水子供養」研究の問題点の指摘（十分な調査に基づかない一般化の試みや、方向を見定めた研究の不在、そもそも調査があまり為されていないことなど）、「水子供養」を（中絶の経験によるトラウマの）「癒しの方法」として称揚するアメリカ人グループへの批判（都合の良いところしか見ていない点、「水子供養」を支える宗教観念を無視していること）、苦しんでいる人々を本気で助けようとしないう医者や僧侶（分業の成立と見える点、国民の健康よりも別の原則が優先している現状）、悪い結果を生むと公言している事象（中絶）に対し社会的には何の働きかけもせずに「水子供養」を行っている（行わなくても見過ごしている）仏教界への批判にあると言えるだろうか。また、化野念仏寺の水子地蔵の図像について宝珠ではなく胎児を入れた気泡（子宮）を左手に持つ形のものになっている点を指摘している。

藤田庄市 92 a は（論文ではないので使われている文献の情報が不十分なのであるが）「水子供養」という現象を発生から現在まで包括的、記述的にとらえようとしたものである。写真と解説で現代の「水子供養」の概略を簡潔に紹介している。写真で取り上げた宗教施設の基本的な情報（簡単な紹介、所在地、費用など）も示されていてわかりやすい。記述の中で「水子供養」を見る際の基本的な問題点が提示されている。林立する同一規格の地蔵や風車の群などがこの20数年間の間に出現した独特の風景であることの指摘。1955年に胞衣会社の要請で始められた「胎児葬」の指摘。（この点については今後の調査が待たれる。）「水子供養」専門寺院（紫雲山地蔵寺）の出現とその時期に注目していること。霊の世界とともに生きているある宗教者（大和教団・保積史子氏）の世界への「水子霊」の出現とその時期の指摘。「水子」の語が大宅文庫の索引に出てくる年の指摘など重要な指摘を行なっている。また、紫雲山地蔵寺の1972年から1987年までの年毎の地蔵建立数の推移を記載し<sup>5)</sup>、それと合わせて関連する事象の変化を述べており、氏の問題意識の所在が読みとれる。

コールマン 83 は現代日本の家族計画を扱った本である。その中の第4章の中絶を扱った章で「水子供養」に触れている。日本人が家族計画の手段として、効果の高い避妊法をとらずに中絶に頼っているのは、中絶に対して心理的な抵抗が少ないからであるという通説に対して現地での（日本での）調査からそうは言えないという。「水子供養」を見る際に宗教教団から見るのではなく、



社会現象、文化現象の中の宗教的要素を見ていくという方法をとっているため、教団や寺院のみならず、マスメディアに現れる胎児のイメージ、一般の週刊誌の文章に中絶を禁止しようとする勢力の宗教的表現が入り込んでいる様子（「闇から闇へ」）など、日本の（70年代末）中絶をめぐる精神状況を簡潔に記述している。60年代の動きや医療や行政との関わりなど現在有益かつ重要な問題点を幾つか提起している<sup>(6)</sup>。

## 2. 調査・統計

「水子供養」に関する質問紙調査による統計的な報告は2つのグループにより行われている。東京工芸大学の神原和子氏、岩本一夫氏、大西昇氏のグループと京都大学の高橋三郎氏（代表）を中心とする現代宗教社会学研究会（他に高沢淳夫氏、高橋由典氏、新田光子氏、伊藤公雄氏、橋本満氏）である。この2つのグループは1987年に提携し合同の研究会も開かれ、集計結果は合わせて高橋三郎 92 に報告されている。

神原他 85, 87 は「水子供養」をしてほしいと寺院を訪れる人々を対象とした調査であり、貴重なものである。85年のものは中間報告と見られ回答数 558 の集計結果、87年のものは 1127 の集計結果である。結果を見て目を引くのは「供養をしないとタタリがあると思いますか」という問いに対し、「思う」「思うこともある」を合わせて 72.1% という数字が出ていることである。また、これに続いてその内容を問う質問があり（自由記入欄）回答数はそれほど多くはないもののたとえと考えられている内容が知られる。供養をする事で願われる内容も問われており、健康、不幸の消滅、家内安全、子どもの幸せなどが高いポイントをあげている<sup>(7)</sup>。（たたりに関しては新田 92 がこの結果に触れた上で実施団体側の意識との違いについて述べている。）

これに対し現代宗教社会学研究会の調査の対象は寺院、宗教団体、霊能家など「水子供養」の提供者側を対象としたものである。1986年と1991年に合計5種類のアンケート調査を行って

る。「水子供養」を始めた年代が86年の宗教団体・心靈家に対する調査(有効回答数152)では1975年から1980年に42.1%, 1991年の「水子供養」実施寺院に対する調査では1975年から1985年に47.5%と集中しているのが注目される。

新田光子 92はこの調査結果をもとに各教団の教義の内容と「水子供養」受け入れの関係の分析を試みたものである。

鷲見 94は供養儀礼に関して関東地方の寺院を対象に行ったアンケート調査の報告であるが、「水子供養」開始年に関する回答結果を含む。

### 3. 「霊の世界」における「水子」霊

さて、「水子」というこの新しい「霊的存在」は霊の世界を生きている人々の世界の一角にすでにその座を占めているように見える。

池上良正 87はカミサマ信仰における「救い」の問題を追求する中で、依頼者に働きかけてくるとカミサマが判じる先祖・ホトケの「因縁罪障」を先祖たちの(非情な)行為が生み出した(犠牲者の)怨念や思いである場合と、先祖たち自身の「遺念余執」である場合に分けて説明し、後者の中には「水子」も含まれていることを指摘している。また、西津軽郡で行ったアンケート調査の質問項目には運命、運勢、厄年に続いて災因の種類としてキツネ、ヘビ、ネコなどの動物霊、「うらみ」や「こぼみ」、先祖を粗末にすること、苦しんでいるホトケ、に続いて勝手に中絶したり供養していない水子、という質問項目を設けている。

藤田 90は霊能祈禱師の実践を描写する中で相談に訪れる人に示される不幸の原因や解決法を記録している。相談者に事態の成り立ちなどを告げる神仏、先祖霊、動物霊、と並んでそこには「水子」も出てくる。氏は篠栗の庄崎良清氏(庄崎 93には彼女が「水子供養」を感得したときの様子が述べられている。また、「水子」の性格や彼女の見た世界が語られている。)の「カミがかり」を大別して死者霊の語りと神仏のお告げとし、前者を説明して、苦しんでいるとか喜んでいたり告げたり予言をしたりという点で「水子も基本的には先祖霊と同一だ」という指摘をしている。(藤田 92bにも「水子」が告げられ、対処される例が幾つか紹介されている。大和教団の「みづこ慰霊祭」にも触れている。)

これらはいずれも宗教者による霊の世界との交流の中で不幸の原因であったり、不幸の原因を知らせたり、感謝をしたり、叱咤激励や援助もする存在としての神仏や先祖や動物と並んで「水子」が出現しているものである<sup>(8)</sup>。

寺岡政敏・小島恵一 91, 寺岡 94は精神科の臨床で観察された「水子霊」による憑依の症例に関するものである。「水子」が病因であるという考えが流布した結果、具合が悪いのは「水子」のせいではないかと聞かれて答えに窮することがあるという話が冒頭で紹介されている。「水子」の憑依に関しては赤ん坊として形象化されていることを指摘している。また患者の母親が生長の家の信仰を始め患者の病状好転をおかけと解釈していた、という報告は興味深い。

高橋紳吾 93は精神科の臨床で観察された動物霊による憑き物現象をテーマとしたものである。その中で動物霊による憑きの症例が減少し、祖霊、「水子」霊など「ヒト」憑きの方が選ばれるようになってきていると指摘している。

梅原正紀 83は4つの新宗教教団(神道不公会, 大和教団, 立正佼成会, 解脱会)を取り上げて

いる。これら新宗教教団の「水子供養」の特色として、ブーム以前から信仰活動の中に組み込まれていたこと、財源化のために乗り出してきた伝統仏教系の一部寺院と違い教化活動に組み込まれていることをあげて、簡単な紹介を行っている。

大石隆一 88 は「水子霊」に関する心霊家の見解の比較検討を行っている。

#### 4. 胎児をめぐるイマジネーション

斉藤美奈子 94 は「望まない妊娠を登載した小説」を「妊娠小説」と命名し近代文学において「妊娠」がどのように描かれてきたかを分析する。優生保護法以後を「本格妊娠小説」の時代としているが、中絶を「否定もしないかわりに権利として堂々と認めもしない」法的、精神的状況が「中絶はしてよいが、仕方にこだわられ」という風習を生み、態度、心を重視する「墮胎道」（妊娠小説は「墮胎道」実践の書でもある）が形成されたのだ、という喝破は「水子供養」のひとつの説明になっている<sup>(9)</sup>。（氏は「抑圧装置」としての危険性とか、「水子供養商売の素地」とも書いている。）第三部の「アニミズムの帝国」と題された一節はさまざまにイメージされた胎児を列挙して「水子供養」の精神風土の指摘と読める。「水子供養」を全面に押し出す宗教施設、教団では和讃だけでなく、詩や歌も作っているが、そこに見られるイマジネーションと平行しているように見える。

#### 5. 出産、中絶等の置かれた状況

上野輝将 90 は刑法の墮胎罪と優生保護法のもとにある戦後の出産や中絶をめぐる状況を、生長の家を中心とした優生保護法改正運動とそれに対する反対運動を、出生数の変化や意識の変化に言及しつつ史料に基づいて追ったものである。「水子供養」に関しては短い記述にとどまるが、国会でのやりとりや法改正の根拠の記述を追っていくと「水子供養」に関連する事実、論理や言葉が読みとれる。

女のためのクリニック準備会 85 は中絶に関する正確な情報を伝える目的で編集された本である。その中に 11 編の体験手記が収録されておりそのうち 2 編が「水子供養」に言及している。「中絶という明らかに個人的な問題にも拘わらず、いわゆる生命尊重派からは罵られ、人を絶望から救うはずの宗教からは水子のたたりとおどされる、女のみが背負わされる身も心もずたずたにされる、この恐ろしい経験に、十代の私は真正面にぶつかる勇氣はありませんでした。」(p.120)という記述は不特定多数に向かって「水子」という媒体に乗せて伝達されていたメッセージの内容を検討する上で重要なものではないか。（もう 1 編は「水子地藏」を勝手に建てられたことへの怒り。）罪障感、罪の意識は、よく引用される毎日新聞社の「家族計画世論調査」の中絶関連の質問項目でもあり<sup>(10)</sup>、「水子供養」を論じる人もそこから話を始めることが多いが<sup>(11)</sup>、この本では非常に短いものながら罪障感の発生機序も説明している。

角田由紀子 91 は「法」の中で「性」がどのように位置づけられているかを解説したものである。その中の一つの章が墮胎罪と優生保護法を扱っている。この章のはじめに紫雲山地蔵寺の紹介があり、「水子」のたたり説は中絶を経験した女性が覚えるであろういのちの芽へのいとおしさという素朴な思いを増幅させ、罪の意識に転化させる働きをしている、と述べられている。さらに墮胎罪の存在が精神的な圧力を強めているという。

日本家族計画連盟 84, 「女の人権と性」シンポジウム有志 88 には多くは短いものながら「水子供養」に対する怒りや苛立ちの表明が見られる。

## 6. 発生の過程と展開の過程

落合誓子 83 は浄土真宗の立場から「水子供養」は「神道」であるとして排斥し、また明白な政治的な意図を持ったものであるとする。「水子供養」の「仕掛人」を故佐藤栄作首相（当時）が設立に関与した紫雲山地蔵寺の橋本徹馬、生長の家の谷口雅春とし、目的を優生保護法改正（中絶の事実上の禁止）と述べている。落合 89 では「水子供養」を行なう寺を、仕掛けの寺、便乗して金儲けをする寺（宗教的「根拠なしにやっている」水子供養専門の寺）、人の要請に押される形で始める寺に分類している。（新田 92 がすべて同列に扱っているのと対照的である。）落合 91 では同趣旨のことが事例を引きながらわかりやすく語られている。

石川力山 92 は「水子供養」を「悪しき業論」の更なる悪援用であると論じ、そのうえ一方的に女性だけが糾弾される女性差別・女性蔑視の問題も含むものであると言う。この文章は表題からもわかるとおり曹洞宗内で和讃の見直しを行ったものである。1978 年に成立した「水子地蔵和讃」が上記 2 点の基準に抵触することを論じている。その中で、「水子」地蔵の成立の歴史的説明はまだなされていないが（業者の宣伝の介在を一説として指摘している）、「水子供養」の観念を世に広める積極的な媒介者となり、弊害を生み出した責任は仏教側にあると指摘している。

曹洞宗宗務庁 94 は宗内の活動から差別語を排除する目的で書かれたものである。言葉に焦点を当ててではなくその言葉を発する人の意識が変わらなければ差別語はなくなるという観点で差別を 9 種類の分類のもとに具体例をあげながら解説している。「水子供養」はその中の性差別の章で取り上げられており「後ろめたさ」は自然発生ではないという観点が見られる。「水子供養」は供養という名は付いているが「似て非なるもの」とされ、「『悪しき業論』をベースにした女性差別と『おどし』、「差別的な儀礼」とされている。

ハーデイカ 86 は日本の新宗教を把握するための図式の提示と黒住教の地方教会のモノグラフであるが、その中で地域住民の中の信者ではない人に依頼されて行うものの一つとして「水子供養」をあげている。

中牧弘允 89 はハワイに伝えられた地蔵信仰に関する記述の中で「水子地蔵」の形態や「水子供養」に触れている。また、具体的な例としてはカパラマ不動教会が紹介されている。中牧 90 は中の一つの章でブラジルにおける生長の家の「流産児供養」の様子を伝えている。また、カトリックとの関係にも触れている。

## 7. 解釈と位置づけ

大貫恵美子 85 は日本文化における「病気」のとらえ方を記述したものである。この中で日本人に特徴的な病気の因果関係のとらえ方として「物態化」（因果関係を神経組織や血液型や水子などの客体や現象に帰す論理）をあげている。「水子」に関する論理は日本人の信仰体系や墮胎に対する伝統的な考え方とは矛盾するが、これを「物態化」の例と考えれば日本人の病気観と論理的に矛盾しないという。その社会的な機能として運不運を他人のせいにしな、という点をあげている<sup>(12)</sup>。「水子」に関しては「多義的象徴」として（病因ではなくて）「さまざまな懊悩の表現」で

あるともいう。同時に「複雑な背景を持っており、簡単に額面通りに受け取ってはならない」とも指摘している<sup>(13)</sup>。

星野英紀・武田道生 85 は「水子供養」の実際の例には触れていないが、背景として日本宗教のアニミズム性をあげ、先祖供養から動物供養、人形供養、針供養を行なう日本人の宗教行動の中に位置づけている。また、「識者の意見」(本文献目録中では例えば寺内 84, 宮田 90 が相当しよう)と述べられているものに対する反論の形(人工妊娠中絶件数が多い層に関する記述も「若者ではなく」中年主婦層である、という記述になる)の記述が何か所か見られ、当時の「水子供養」イメージが知られる<sup>(14)</sup>。

小野泰博 82, 83 は「流れ灌頂」に関する記述が主体で「水子供養」については「苦悩の個別化」「不安の個別化」という問いかけが行われるのみであるが、小野 88 はその観点を詳述したものである。脳死を人の死とし、臓器移植を推進しようとする人間観との矛盾、なぜ女性がおびえるのか、施主が一体ずつの地藏を並べてまつという形態の由来は何か、などの問いかけがなされている。「不安の個別化」についても問いかけの形で述べている。

特に「癒し」(はじめの2つは限定されたトラウマに対する「癒し」)という観点から論を展開させたものには以下のものがある。

スミス 88 は氏がハリソン氏とともに 1986 年から続けていた「水子供養」調査の途中で書かれたものである。多くの女性が貧・病・争の原因を過去の中絶に結びつけるが、それをたたりという信仰形態で説明するのは表面的すぎる。中絶、流産、死産という喪失の経験から生ずる情緒的な混乱を乗り越える作業をもっと深いところで行っているのではないかという仮説を提示している。「水子供養」を何らかの癒しと見ることは可能であるが、それがとりわけて特定のトラウマを癒していることをいうためにはそれを裏付けるだけの詳細な実証的な調査が必要であろう。

ラフルアー 92 は妥協点の見いだせないアメリカの中絶論争に一つの解答を提示すべく、中絶を容認しつつ中絶の精神的後遺症にも癒しの場(「水子供養」)を用意している例として日本の事例を紹介したものである。癒しの儀礼としての「水子供養」の根拠は結果の公表されていないバードウェル・スミス、エリザベス・ハリソン調査<sup>(15)</sup>である。結果は見えていないが調査の結果肯定的なものとも聞いている、というのであるが、中道を行く(たたりを否定し、心の問題として癒しの場を与えるとして)伝統仏教を賞賛しているが、その根拠が『大法輪』87 年 7 月号の特集「“霊のたたり”はあるか」というのも問題である。また、誰が何をどう癒しているのかという重要な問題については何も実例が挙げられていない上に具体的な記述もない。

橋本満 87, 90 も「癒し」という観点から「水子供養」をとらえている。「女性化」した社会で「女性的不安」が表面化し「女性の癒しの場」を作り出したのが「水子供養」であるという<sup>(16)</sup>。

山折哲雄 92 a と 92 b の内容は一部重複しているが、70 年代に入って「水子供養」が盛んになった背景として、優生保護法改正の動きにともない中絶が話題になったこと、医学の進歩により胎児が犯しがたい生命であるという観念が広まったことをあげる。欧米に比べ日本では中絶による重大な心理的、生理的障害が「異常な高率」を示しているとして、「水子供養の秘密を解く鍵」ではないかとする。スミス、ハリソン調査<sup>(17)</sup>を引きながら罪障感が「心理的・生理的障害」を引き起こす原因であるとして、「水子供養」をその癒しの場と位置づけている。

## 8. 「水子のたたり」の論理

「水子供養」は基本的にたたりの原理がなければ成立しない。この「たたり」という言葉および「霊」の存在は伝統仏教のタテマエと衝突するため伝統仏教の僧侶が「水子供養」を語ろうとするときには語法、論理にさまざまな工夫が為される<sup>(18)</sup>。北塔光昇 83 は本願寺派の僧侶として「霊のたたり」は否定せねばならず、しかし「水子供養」の依頼者に対して何らかの対処をしたいという立場<sup>(19)</sup>を説明したものである。「水子供養」の論理から「たたり」の語を取り除いた時に何が残り、何が強調されるかのわかりやすい例である。（殺人罪で地獄必定、という言い方になる。しかし、世俗の法律を持ち出してしまったため、かえって非難の標的が浮き彫りになっている。日本母性保護医協会に対して殺人予備罪とかの話は全く出てこない。）

寺内大吉 84（以前に『大法輪』誌上に発表されたものの再録）は僧侶が「水子供養」の論理に乗りながらも「水子供養」を否定しようとしたときに何が残るかの例と見ることができる<sup>(20)</sup>。ここでは、戦後の中絶が、こどもの世界に害悪を及ぼす、そのこどもが「阿呆」である、とたたりという言葉を使わずに結びつけられている。（これも第二群の中核的な文献があげている「水子」のたたりの代表例である。）この文章が「水子供養」への伝統仏教からのきびしい批判として取り上げられている（山折 92 a, b）という事も「水子供養」という現象を理解する上での手がかりとなるものかもしれない<sup>(21)</sup>。

石川 93 は霊もたたりも女性への糾弾も（「水子供養」という言葉も）否定して「水子供養」を行おうとしたときにどのような説明になるかという例と見ることができる。ここで根拠とされるのは「子どもの人権」（「水子」ではなく「子ども」「人」（死者）として供養しようと言うこと）なのである。胎児の定義も子どもの定義もこの文ではされていないが、子どもの語が胚や胎児の意味で使用されている。（この根拠がこれまでに使用されてきた経緯から考えても、論理が破綻しないのであろうか。）

ラフルアー 92 は『大法輪』87 の特集からたたりを否定する立場を読みとっているが、この特集の中の和田謙寿（日本少年補導学会会長）「水子供養は必要だ」は青少年問題と「水子」の関係を述べ「水子供養」の必要性を説いている。「青少年の非行」は「水子」のたたりとして第二群の文献が強調するものだけにこの文は「水子供養」の展開過程を見ていく上で重要な事象であるかもしれない。

千葉徳爾・大津忠男 83 は題名とは裏腹に「水子供養」についての記述は少なくそれも情緒的なものである。「先人の心意」の再生か、とコメントしながらも「バランスを失った現代人の精神の荒廃以外の何物でもなかろう」という。そして「青少年の非行」の話に移っていくのは「水子」のたたり話の反映だろうか。

宮田登氏はその諸著作の中で「水子供養」について触れている。何人かの人々の報告のアンソロジーとでもいう形式のものであるが、「水子供養」を伝統的な心性の「再生」や「復活」として民俗世界との連続性を指摘しつつ、「現代人の荒廃した精神的不安」、「都市のフォークロア」などの説明を加えている。しかし、人工妊娠中絶を「婚前交渉など、その行為が世間一般から認知されないことを前提とする」としたり、「若い世代を中心とするフリー・セックスから必然的にもたらされた結果」（宮田 90）としているのは疑問である。また、現在の日本の中絶に関する法律の説明として「妊娠初期の中絶は憲法で保証された女性のプライバシー権の行使とされており」（宮田



93)としているが、これは1973年のアメリカ合衆国連邦最高裁判所の判決であって日本のことではない。

### おわりに

「水子供養」を対象とした具体的な事例に即した個別研究は見あたらないが、少ないとはいえ対象に迫り得た論考、重要な問題点の指摘はこの18年間に出現している。今後の研究の方向としては、発生の過程を明らかにするという目的を持ちつつ、これまでに指摘されている点を検証していくというごく当たり前の方法しかなかろうと思っている。

\* 目録の作成に関しては先学の方々に直接間接に助けていただきました。一人一人お名前はあげませんがこの場を借りてお礼を申し上げます。

### (註)

- (1) 特に宗内刊行物などは組織的に収集したものではありませんのでかなり不完全であろう。また、他の文脈の中で「水子供養」について論じているものに関しても私の狭い見聞の範囲で見つかったものにすぎない。今後充実させて行く。
- (2) 藤田 92 a は73年の週刊誌で注釈つきで使用されていると報告している。東 77 は「水子地藏」を探しに出かけた紀行文であるが、「みずこ」と発音するこの言葉を知らなかったことを冒頭に記している。
- (3) バーゲン 92 は水子の語を「妊娠や中絶、流産、死産に関連する経験及び想像力」の意味にまで拡大して、川端康成の文学を論じている。すでに現代日本語の「水子」の辞書的な意味からもかけ離れており問題がある。また、川端の小説の登場人物がが化野念仏寺に行くところを「水子供養で有名な化野念仏寺」としたり（この時代にこの寺はまだ水子供養で有名ではなかったはずである）、「音子は7カ月で出産したが死産であった。この水子は…」という形でこの語を使う。単に水子の意味を誤解しているだけかもしれないが、また、「ラフカディオ・ハーンの水子供養の描写」、というも拡大解釈の例である。高沢 92 は日本の人工妊娠中絶数の統計を扱った論文であるが、「…15歳以上の女性の6割近くが「水子」の生産者である」などの表現をしている（橋本 90 にも「生産」の表現がある）。このほか「水子をつくった」、「水子がいる」などの表現が見られ、「水子」が実体視されている。論文とは別の場で表現すべきであろう。
- (4) 客観的記述に見える、あるいはそう意図されている新聞記事が「水子供養」の展開に果たした役割については今後慎重な調査と分析が必要であろうと考えている。また、新聞社、新聞関係者の役割についても同様である。
- (5) 棒グラフにしたのが図1。このグラフは今回の本文中では特に意味を持つものではないが、今後の研究の中では一つの宗教施設の年毎の「水子供養」申し込み数の変化は、特にいくつかの例が集まれば意味を持つ。一つの宗教施設の「水子供養」関係の数字を年次を追って記録しているのはこのほかには星野 94。辯天宗の1979年から1988年までの「月別水子供養勧募」の数を載せている。
- (6) 森栗茂一 94 はその表題からもわかるとお書き手の意図としてはこのグループに入るものであるが問題が多い。4点についてそれぞれ1例づつのみ指摘する。1. 論旨の根幹に関わる事実誤認。「…昭和40年に、秩父地藏寺が…」(紫雲山地蔵寺、通称水子地藏寺の建立は1971年つまり昭和46年である。) 2. 根拠や意味の不明な記述。「京都の水子供養は『家の障り』と理解

する傾向があり…」(何が根拠か？ また、「家の障り」とは何か?) 3. 「…その水子供養の作られ方については具体的研究があるわけではない」「こうしたデータ(史料的データ)は新聞や学術文献にはほとんど登場しないから資料にはならない」(かっこ内引用者)、と述べているが、新聞もさることながら、氏が論文の最後に「追記 民俗学以外の分野では、次のような研究がある」としてあげている文献の中には直接関係するものが含まれている(高橋 92 など)。(この「追記」に記された文献は高橋 92, 新田 91, [後者は前者に包摂されている]にあげられている文献目録によるものと見られるが、英語のものが省かれ、日本語のものも何点が省かれている。省かれたものの中にブルックス 81 がある。) 4. 図や表に関しても例えば「本報告のまとめ」の部分の論拠としてあげられている図 4 は「(記入していない)」との但し書きはあるが、何をあらわした表かはっきりしない。

- (7) 神原 85, 岩本 85, 大西 85, 神原 87, 岩本 87 はこの調査に関連した考察である。85 年のものと 87 年のものと同じ題名であるが内容は違う。岩本 85 は紫雲山地蔵寺の山肌に整然と並んだ地蔵の数を「その数は十万とか二十万とか、とてもはかりしれない」と書いている。驚きの表現としては良く理解できるが、1994 年 8 月現在で寺側の発表で約 14000 である。藤田 92 a, ブルックス 81 にそれぞれの時点での数の記載がある。
- (8) 森栗茂一 94 は上記藤田 90 の例を、広告塔を建て出版を行う「水子ビジネス」関連の例として「抜粋」紹介しているが「水子」だけが突出していない典型のような事例を「水子ビジネス」の例とするのは不適當であろう。「抜粋」部分のうち原著では 1. の「相談事の原因(祟り, 障りの原因)」の項に「ヘビを殺している, ヘビは出雲の神のおつかいである, ネズミを殺している。ネズミの嫁入りのネズミだった。」という部分が「水子。…」の前に記載されている。指示された供養も「ヘビ, ネズミ, 水子の供養」とあるところをヘビとネズミを省いている。この例では「水子」は幾つかの原因の一つとして出てきているわけでその説明をせずに(文脈を省いて)「水子」のみを取り上げるのは対象を歪めることになる。(他の項も同様)。
- (9) この点は第二群の文献に関わることでもある。
- (10) コールマン 83 はこの質問の選択肢のバイアスについて指摘している。肯定的な感情を示す選択肢がない。
- (11) 高橋由典 87 は中絶を「生命剝奪行為」とし、他人を殺した人間が供養で救われないのに、なぜ「水子供養」に限って罪責感の軽減が見られるのかという問いをたてている。この問い自体も疑問である。罪障感についてはスミスその他、中絶の経験から直接(自然に)生じるかのように扱う論者は多い。
- (12) 小倉千加子 88 は大貫 85 の考え方を踏襲した上で本来は別に原因があるものを、苦しむ本人に原因を帰すものとしてとらえている。同じ現象を指しているのではあるが、社会的機能という場合、「運不運を他人のせいにしなさい」とも「ある現象を他人のせいにする」とも言えるわけである。「不幸や不運の原因, 宇宙の中に存在する悪を, 他の人々, ことに患者自身に親しい人々の責任にしなさいこと」(p. 135) という大貫氏の見方は(「水子」に関しては)「水子供養」の提供者の側の論理に着目した場合には別の言い方ができるのではないか。
- (13) 青柳真智子 85 は病気の原因が「水子供養」の不在ととらえている観察例に触れている。
- (14) 本文中、辯天宗の水子供養塔を「巨大な地蔵タワー」としているがこの本尊は「慈母辯財天」である。(細かいことのようにであるが「水子供養」研究の観点からは重要かもしれないので)ブルックス 81, 孝本 88 も地蔵としている。
- (15) アンケートの回答の一部が臨済宗妙心寺派教化センター 89 pp. 159-66 に収録されている。また、同書は「…エリザベス・ハリソンさん(アメリカ)は「すばらしい水子供養」と、評価しています。」(p. 59) という報告も付している。

- (16) このとらえ方は氏の枠組み（「小さい社会」=日常的な些細なことに関心が向けられる社会=情緒、感情、個人の意志に価値が置かれる社会=女性化した社会、に対して「大きい社会」=国家、社会など大状況に関心が向けられる社会=有機的共同体の安定した協調的社会=道徳的秩序の優先する社会という二分法的な社会のとらえ方があり、前者に向かうのが「女性化」とされている）の中に「水子供養」で観察されると氏が考える要素（たたり、癒し、供養に赴く女性、中絶による罪の意識など）が連想ゲームのように当てはめられるため「水子供養」の説明としての論理的一貫性がはっきりしなくなっている。（橋本 87）
- (17) 註(15)参照
- (18) 基本的には第二群の文献の問題であるので、機会を改めて述べたい。著者の意図によって線引きを試みたので、ここに取り上げたものは第一群に入れた。
- (19) 「水子供養」への問題関心の焦点は「水子供養」の依頼に対してどう対処するかに集まっている。どのようにたたり祓いの考えを改めさせ自宗の教義にあった形で罪を自覚させるかがポイントのようである。池田勇諦 82, 清沢隆信 83, 伝道院特定課題研究会 84, 大法輪編集部編 90（『大法輪』87年7月号の特集の再録）、児玉他 92, 奈良 94 など。
- (20) 寺内氏は自分の寺の過去帳の話から始める。明治 36 年の 7 つの葬式はいずれも子どもであるという（童子 2, 童女 1, 胎児 1, 水子 3）。それが昭和 28 年以後は皆無になる、ということから戦後日本の「墮胎天国」非難が始まる。（避妊が嫌いで）「できればいとも平然と医師のもとへでかけてゆく」「経済アニマルもどきの性鬼」（女性）が「子どもの世界にどんな公害を垂れ流したのか」と嘆かれる。「水子」は「性鬼ども」の「垂れ流したヘドロ」と言い換えられているが、それが子どもの世界に害を与えるものとされる。かつては「ぎりぎりの事情があった」（「母体が弱い、家計の貧窮、産みたかったが流産）上、供養をされていたものが、「選良だけを産み落とす」母親や育児のわずらわしさを嫌う母親の「打算」によって行われているのが現代の「水子供養」であるというのが結論であるようだ。後半はこの「性鬼ども」の産み落とした「選良」の阿呆さ加減が嘆かれたり、「水子地藏」に「性感帯を…刺激」される女子高校生が出てきてせりふをしゃべったりするのであるが省略。
- (21) 山折 92 a, 92 b.

「水子供養」関連文献目録（第一群：研究論文・評論・ルポルタージュ等）

- あごら 28 号編集会議編『産む産まない産めない』1983, BOC 出版部
- 安西篤子「“水子供養” 商売のいかがわしさ」日本家族計画連盟『悲しみを裁けますか』1983, 人間の科学社
- 青木やよひ「生命とは何か—南北問題から考える—」「女の人権と性」シンポジウム有志・編『沈黙をやぶった女たち』1988, ミネルヴァ書房
- 青柳真智子「忌避された性」『日本民俗文化大系第十巻 家と女性』1985, 小学館
- 東順子「水子調査道中記」『大法論』1977, 44/2, 大法輪閣
- Bargen, Doris G. “Ancestral to None—Mizuko in Kawabata—” *Japanese Journal of Religious Studies* 1992 19/4, 南山宗教文化研究所
- ポストン女の健康の本集団「水子供養」（囲み欄）『からだ私たち自身』1988, 松香堂
- Brooks, Anne Page “Mizuko Kuyo and Japanese Buddhism” *Japanese Journal of Religious Studies* 1981
- Chamberlain, Gary L. “Learning From The Japanese” *America* 1994, September 17

- 千葉徳爾, 大津忠男『間引きと水子一子育てのフォークロア』1983, 農山漁村文化協会
- Coleman, Samuel *Family Planning in Japanese Society: Traditional Birth Control in a Modern Urban Culture* 1983 Princeton University Press
- 大法論編集部編『霊とは何か』1990, 大法輪閣
- 伝道院特定課題研究会「真宗の立場から見た『みずこ』問題」『宗報』1984
- ドクトル・チエコ「妊娠中絶」朝日ジャーナル編『女の戦後史 I 昭和 20 年代』1984, 朝日新聞社
- 藤田庄市『拝み屋さん』1990, 弘文堂
- 藤田庄市「無明の転生 現代水子供養事情」『別冊太陽』1992 a no. 77 平凡社
- 藤田庄市『霊能の秘儀』1992 b, 扶桑社
- Gabrielson, Ruth “A Prayer for the Water Children: *Mizuko Kuyo* in Japan” *Areopagus* 1992, 5 no 5
- Hardacre, Helen *Kurozumikyo and the New Religions of Japan* 1986 Princeton University Press
- 橋本満「不安の社会に求める宗教—水子供養」『現代社会学』1987
- 橋本満「水子供養と女性の癒し」原田平作, 溝口宏平・編『性のポリフォニー』1990, 世界思想社
- 桧垣巧「家庭内暴力・水子供養・祖霊信仰—その実態と背景—」『高野山大学論叢』1993, 高野山大学
- 星野英紀, 武田道生「負の精神性とやすらぎ—現代水子供養の底流—」『真理の創造』1985, 24
- Hoshino Eiki and Takeda Doshō “Indebtedness and comfort: The undercurrents of *mizuko kuyo* in Contemporary Japan” *Japanese Journal of Religious Studies* 1987, 14
- 星野英紀「水子供養」『新宗教事典』1991, 弘文堂
- 星野英紀「新宗教における供養儀礼と墓地」『宗教学年報』1994, 24 大正大学宗教学会
- 共桁碧「性の位階—フェミニズム的視覚からの宗教研究のための序—」『宗教研究』1989, 280 号, 日本宗教学会
- 池田勇諦「水子供養をめぐる—真偽決判に生きる」『真宗』1982
- 池上良正『津軽のカミサマ』1987, どうぶつ社
- 石井奈緒「病に対する新宗教の言説 中山身語正宗を事例として」波平恵美子編『病むことの文化 医療人類学のフロンティア』1990, 海鳴社
- 石川力山「『水子地藏御和讃』について—水子供養習俗とその弊害—」曹洞宗伝道部詠道課編『人権からみた梅花流詠讃歌』1992, 曹洞宗宗務庁
- 石川力山「『水子供養』をめぐる」『曹洞宗報』1993, 11 月号 (通巻 699 号) 曹洞宗宗務庁
- 岩本一夫「みず子供養にみる宗教性の問題」『東京工芸大学工学部紀要』1985, 8 巻 2 号東京工芸大学
- 岩本一夫「みず子供養にみる宗教性の問題」『東京工芸大学工学部紀要』1987, 10 巻 2 号東京工芸大学
- 岩波仏教事典「水子」『岩波仏教事典』1989, 岩波書店
- 兼松左知子, 鈴木尚子, 丸本百合子, 山本直英, 青木やよひ「座談会: 中絶は法で罰するべきか」日本家族計画連盟『悲しみを裁けますか』1983, 人間の科学社
- 川橋範子「書評: William LaFleur 著 *Liquid Life: Abortion and Buddhism in Japan* Princeton University Press: Princeton, N. J., 1992」『光陵女子短期大学紀要 Cross Culture』1994, 12, 光陵女子短期大学
- 北塔光昇『真宗と水子供養』1983, 永田文昌堂
- 清沢隆信「真宗における水子供養」『宗教と現代』1983, 鎌倉新書
- 小林一民「水子供養の寺々 (都内)」『大法輪』1979, 46/12, 大法輪閣
- 児玉暁洋, 西田真因, 渡辺晃純, 加藤浩, 伝講生 19 名「座談会 水子供養をめぐる」『教化研究』1992, 108, 真宗大谷派教学研究
- 駒沢晃『写真集 風車まわれ—水子地藏に祈る』1983, 春秋社

- 神原和子「みず子供養にみる靈魂の問題」『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編, 1985, 8巻2号東京工芸大学
- 神原和子「みず供養にみる靈魂の問題」『東京工芸大学工学部紀要』1987, 10巻2号東京工芸大学
- 神原和子, 岩本一夫, 大西昇「『日本人の宗教意識』に関する共同研究」『東京工芸大学工学部紀要』1987, 10巻2号, 東京工芸大学
- 神原和子, 岩本一夫, 大西昇「『日本人の宗教意識』に関する共同研究」『東京工芸大学工学部紀要』1985, 8巻2号, 東京工芸大学
- 孝本貢「現代都市の民俗信仰—家郷再建と鎮魂」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』1988, 有斐閣
- LaFleur, *Liquid Life: Abortion and Buddhism in Japan*, 1992, Princeton University Press
- 宮田登「『水子』思想の沿革」『産科と婦人科』1990, 57巻8号, 診断と治療社
- 宮田登「水子供養」『大衆文化事典』1991, 弘文堂
- 宮田登『怖さはどこからくるのか』1991, 築摩書房
- 宮田登「『心なおし』はなぜ流行る』1993, 小学館
- 宮田登「生まれ清まり」生命尊重センター編『豊かな「いのち」胎児は未来をはこぶ人』1993, 東信堂
- 溝口明代「水子信仰をめぐって—第三期女性解放運動の日本の特殊状況」『日本女性学会ニュース』1986, 30, 日本女性学会
- 溝口明代『水子寺と靖国をささえるもの』1985, 異国編集室
- 溝口明代「水子供養と女性解放 宗教を利用した母性支配を撃つ」『「母性」を解説する』1991, 有斐閣
- 森栗茂一「水子供養の発生と現状」『国立歴史民俗博物館研究報告』1994, 57, 国立歴史民俗博物館
- 中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究—日本・アメリカ・ブラジル—』1990, 刀水書房
- 中牧弘允『宗教に何が起きているか』1990, 平凡社
- 波平恵美子「民俗としての性」『日本民俗文化大系第10巻 家と女性』1985, 小学館
- 奈良康明「靈魂の有無を論じて『苦』は解決できない」『月刊住職』1994, 金花社
- 日本家族計画連盟『女の人權と性 わたしたちの選択』1984, 径書房
- 新田光子「『水子供養』に関する統計調査資料」『龍谷大学社会学部紀要』1991, 龍谷大学社会学部学会
- 新田光子「『水子供養』と宗教教団」『龍谷大学社会学部紀要』1993, 4号, 龍谷大学社会学部学会
- Oaks, Laury “Fetal Spirithood and Fetal Personhood: The Cultural Construction of Abortion in Japan” *Women’s Studies Int. Forum* 1994, vol. 17, no. 5
- トム・オカナー「水子供養は誰のためなのか」『宗教と現代』1983, 鎌倉新書
- O’Connor, Thomas P. “Consoling the Infants: For Whose Sake?” *Japan Christian Quarterly* 1984 50
- 落合誓子「水子供養と靈魂教」『女の性と中絶: 優生保護法の背景』1983, 社会評論社
- 落合誓子「水子供養と女の願い」『季刊仏教』1991, 15, 法蔵館
- 萩野美穂「人工妊娠中絶と女性の自己決定権—第二次大戦後の日本—」原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力へ』1991, 新曜社
- 小倉千加子『セックス神話解体新書』1988, 学陽書房
- 大西昇「みず子供養」にみる呪術の問題」『東京工芸大学工学部紀要』1985, 8巻2号, 東京工芸大学
- 「女の人權と性」シンポジウム有志編『沈黙をやぶった女たち—映画「中絶—北と南の女たち」をめぐって』1988, ミネルヴァ書房
- 女のためのクリニック準備会編『中絶 女たちからのメッセージ』1985, 女のためのクリニック準備会
- 小野泰博「流れ瀧頂から水子供養へ」『伝統と現代』1982, 75 伝統と現代社
- 小野泰博「水子供養の背景を求めて」『宗教と現代』1983, 鎌倉新書

- 小野泰博「水子供養と仏教」『仏教民俗学大系 4 祖先祭祀と葬墓』1988, 名著出版  
大貫恵美子『日本人の病気観—象徴人類学的考察—』1985, 岩波書店  
大石隆一『心霊大全』1988, 鷹書房  
大藤ゆき「水子供養」『日本大百科全書』1988, 小学館  
Picone, Mary J. “Buddhist Popular Manuals and the Contemporary Commercialization of Religion in Japan” *Interpreting Japanese Society*. 1986 Oxford University Press  
臨済宗妙心寺派教化センター教学研究室『「業」の説に関する本派僧侶の意識とその実態』1989, 臨済宗妙心寺派宗務本所  
斉藤美奈子『妊娠小説』1994, 筑摩書房  
坂本要「水子供養」『平凡社大百科事典』1985, 平凡社  
島蘭進「水子供養」『現代用語の基礎知識』1994, 自由国民社  
清水邦彦「昭和四十五年以前からの水子供養」『西郊民俗』1994, 148  
清水邦彦「水子について」『比較民俗研究』9, 1994/3  
『シリーズ・いまを生きる 9 女・妊娠中絶』1984, ユック舎  
庄崎良清（藤田庄市 聞き書き）『おみくじ 神仏の器となりて』1993, かど創房  
『宗教工芸』「水子供養寺の紹介」連載 1-5, 1979 1/1-1/5  
Smith, Bardwell “Mizuko kuyo: A way to Grieve” *Terra* 1989  
Smith, Bardwell “Buddhism and Abortion in Contemporary Japan: Mizuko Kuyo and the Confrontation with Death” *Japanese Journal of Religious Studies* 1988 15/1  
曹洞宗宗務庁・編『差別語を考えるハンドブック』1994, 解放出版社  
高橋由典「罪責感とその軽減—水子供養 調査から」『ソシオロジ』1987, 99  
高橋三郎（代表）『「水子供養」に関する統計調査資料』1992, 京都大学教養部社会学教室  
高橋紳吾『きつねつきの科学』1993, 講談社ブルーバックス B-985  
高沢淳夫「人工妊娠中絶の計量的考察—「水子供養」現象との関連をめぐって—」『人文』1993, 39 集, 京都大学教養部  
武田道生「都市寺院における『供養儀礼』の研究—現代人の靈魂観を通じて—」『宗教研究』1991, 287 号, 日本宗教学会  
寺岡政敏, 小島恵一「水子霊の憑依現象と水子信仰」『現代のエスプリ』1991, 志文堂  
寺岡政敏「水子霊による憑依」『AZ』1994, 32, 新人物往来社  
寺内大吉「現代の水子供養」『地蔵さま入門』1984, 大法輪閣  
角田由紀子『性の法律学』1991, 有斐閣  
Tsuya, Noriko O. “Liquid Life: Abortion and Buddhism in Japan, by William R. LaFeur,” *Contemporary Sociology—A Journal of Reviews* 1994, Jan V23, N1  
上野輝将「出産をめぐる意識変化と女性の権利」『日本女性生活史 5. 現代』1990, 東京大学出版会  
梅原正紀「新宗教と水子供養」『宗教と現代』1983, 鎌倉新書  
雲輪瑞法「水子供養に思うこと」『地蔵さま入門』1984, 大法輪閣  
鷲見定信「民俗信仰の再生と供養儀礼」『宗教学年報』1994, 24, 大正大学宗教学会  
Werblowsky, R. J. Zwi “—Mizuko kuyo—Notulae on the Most Important “New Religion” of Japan” *Japanese Journal of Religious Studies* 1991 18/4  
ヴェルブロウスキー, R. J. ツヴィ「水子供養—最も重要な日本の「新宗教」に関する覚え書き—」(訳・鳥井由紀子)『國學院大學日本文化研究所紀要』1993, 72  
山折哲雄「母心の原風景『生まれ変わりの』靈魂観」『別冊太陽』1992 a, no. 77, 平凡社  
山折哲雄「9 日本人の場合」『岩波講座 宗教と科学 1 宗教と科学の対話』1992 b, 岩波書店

Young, Richard F. "Abortion, grief, and consolation: Prolegomena to a Christian response to mizuko kuyo." *Japan Christian Quarterly* 1989

弓山達也「弁天宗における救済論の展開—特に水子供養と関連させて」『宗教学年報』1994, 24, 大正大学宗教学会